

福井のお雇い教師ブラウネルについて

青木孝文

はじめに

日露戦争中の明治三十七年（一九〇四年）～三十八年、全米公共図書館の日本関係書籍の人気図書第一位は、ラフカディオ・ハーンの『神國日本』であるが、それに続く第二位が、クラレンス・ルドロウ・ブラウネルの『The Heart of Japan』（日本の心）であった。⁽¹⁾ 著者ブラウネルは、ハーンに先立つこと四年、明治十九年（一八八六年）に來日し明治二十四年までの五年余、日本に滞在した。この間、東京専門学校、東京学館、富山県尋常中学校、福井県尋常中学校で英語教師を務めたことが知られているが、その詳細については不明な部分が多い。ブラウネルの先行研究として高瀬重雄氏と高成玲子氏⁽²⁾の研究があるが、福井県内におけるブラウネルの動向については殆ど触れられていない。本稿では、筆者が近年の調査で明らかにすることができたブラウネル関係の資料を紹介すると共に福井県内での

足跡について若干の考察を試みた。

一 C・L・ブラウネルの略歴

『The Heart of Japan』の翻訳書『日本の心』⁽²⁾のあとがき・資料編をもとに、以下にブラウネルの略歴を記す。

クラレンス・ルドロウ・ブラウネル Clarence Ludlow Brownell は、一八六四年六月六日アメリカ合衆国コネチカット州ハートフォード、ローレル街二十番地で生まれた。スタンフォード兵学校卒業後、一八八五年から八六年にかけてハーバード大学で英文学を学び、さらにステイブンス工科大学に学んで文学修士および理学士となった。大学卒業後、直ちに世界歴訪の旅に出發、一八八六年（明治十九年）に來日した。東京専門学校、東京学館、富山県尋常中学校、福井県尋常中学校で英語教師を務め、一八九一年に離日するまでの

五年余を日本で過ごした。この間、シアトル『ポストインテリゲンサー』や『ニューヨーク・プレス』などの英米の雑誌、新聞に日本関係の話題や記事を送っていた。

離日後の十年間の消息は不明であるが、一九〇〇年、ニューヨークのクェール・アンド・ワーナー社からブラウネルの第一作『Tales from Tokio』（東京からの物語）が出版されている。一九〇〇～一九〇三年ロンドンに滞在し、この間、大英博物館で日本の歴史と仏教に関する特別な仕事（現存する資料から本願寺に関する仕事であったと推測される）に従事した。ジャバン・ソサイアティ会員となり、一九〇二年四月の例会では、『Hongwanji and Buddhist Protestantism in Japan』のタイトルで発表している。この日の司会には「ブラウネルが日本で滞在した五年間は、普通の生活の十五年分にも相当するような経験であること。仏教寺院、特に本願寺派の寺で厚遇を受けたこと」などを紹介している。日英関係の月刊誌『日英新報』などに投稿しており、『日英新報』一九〇二年九月号には「日本の考古学探検隊」のタイトルで、西本願寺新門大谷光瑞率いるシルクロード探検隊（大谷探検隊）のロンドン出版を他社に先駆けて詳しく正確に報じている。同一九〇二年、第二著作『The Heart of Japan』がロンドンのメンフィス社から出版された。

その後、アメリカに戻ってジャーナリストとして活躍し、一九〇五～一九〇六年にかけてサンフランシスコの『クロニクル』やポートランド『オレゴンアン』、ロサンゼルス『タイムズ』紙に記事を書く。一九〇六年、サンフランシスコ『イースト・アンド・

青木 福井のお雇い教師ブラウネルについて

ウエスト』準編集長に就任した。同年『日本における欧州と米国、加州における日本』を著した。一九〇七年、『ザ・クラリオン』のスタッフとなり、さらにコネティカット州ウエスオハイヴンで教会紙を編集した。一九〇九年、オハイオ州デイトンラテン語学校校長となる。一九一〇～一九一二年にわたって、オハイオ州西部農業地域の教育状況特別研究に携わった後、インディアナ州ヴァーライソ大学で英語および数学教師となった。一九一一年、四十七歳でノーマ・ピンカーソンと結婚した。その後、インディアナ州ゲイリーのフォローベル・スクールで社会奉仕の仕事をしたが『太平の太平洋（一九一四年）』『教育の相互作用（一九一六年）』『日米通商関係（一九一六年）』『日本の戦争財源限度（一九二〇年）』などの日本関係の本を次々に著した。一九二七年（昭和二年）、ゲイリーにて死去、享年六十四歳。ジャーナリストであり教育者であった。ブラウネルは、ジャパノロジストとして世に知られており、同年二月三日付『ニューヨークタイムズ』掲載のブラウネルの死亡記事の見出しには、『C. L. BROWNELL DIES STUDENT OF ORIENT』と記されている。

このブラウネルが、二十歳代に福井県尋常中学校に勤務し、福井に居住していた。

二 福井県尋常中学校におけるブラウネルの前任者たち

（一）明治年間における旧制福井中学校の外国人教師

旧制福井中学校は、藩校「明道館」「明新館」の流れを汲む。「明

新館」(明新学校)には、ルシー、グリフィス、ワイコフ、マゼットなどの外国人教師が勤務したが、廃藩置県および福井県(敦賀県)の石川県編入等に伴い、藩校の後身としての中学校は、明治九年(一八七六年)に廃校となり、いったん断絶した。その後、旧藩主らの尽力により、明治十二年に福井公立明新中学校として新たに開校したが、福井県の所轄に移ったのは、福井県誕生、中学校教則大綱の発布を経た後の明治十四年八月である。明治十五年一月、福井県立福井中学校として開校式を開き再創立した。その後、明治二十二年一月に福井県尋常中学校と改称、明治三十二年に中学校令改正に伴い、名称は、福井県福井中学校となった。⁽⁶⁾

明治十九年四月に公布された「中学校令」では、従来の中学校を尋常中学校(五年制)と高等中学校(二年制)に二分し、予算措置対象の尋常中学校は各道府県に一校と定めた。「中学校令」に続く同年六月に制定された「中学校ノ学科及其程度」で英会話が必修科目とされたことにより、英会話教育が重視され、全国各道府県の尋常中学校における外国人教師の需要が高まった。⁽⁷⁾

明治、大正年間における福井県尋常中学校、福井県福井中学校に勤務した外国人教師を左に示す。職名は、いずれも「嘱託」である。なお、外国人名のカタカナ表記については、中学校旧職員録、新聞記事、公文書で異なっている場合があるが、本稿では、公文書にあるものを用いた。

○エン、ダブリュー、ハルカム 米人 嘱託 英語・文学

明治二十一年五月着任 明治二十三年三月離任

○ビー、ドンケル、キュルチス 阿蘭国人 嘱託 英語・(文学)

明治二十三年四月着任 明治二十三年七月離任

○クラレンス、ラッドロウ、ブラウネル 米人 嘱託 英語・文学

明治二十三年九月着任 明治二十四年三月離任

○ケーリ、リチャード、コルバルン 米人 嘱託 英語

明治三十九年四月着任 明治三十九年六月離任

○アーネスト、ロツトキンス、ブローウエンス 米人 嘱託 英語

明治三十九年九月着任 明治四十二年三月離任

○エ、エル、ホワイトキーン 濠州 嘱託 英語

明治四十二年九月着任 明治四十三年七月離任

○シ、エス、ライラスナイダー 米人 嘱託 英語

明治四十二年九月着任 明治四十五年三月離任

○アトラン、フランツ、ブローム 米人 嘱託 英語

明治四十三年九月着任 大正二年六月離任

○ジエムス、ヒュパードロイド 米人 嘱託 英語

大正元年十一月着任 大正二年六月離任

○ビ、エ、スミス 国籍不明 嘱託 英語

大正四年三月着任 大正九年六月離任

明治二十四年三月離任のブラウネル以降、明治三十九年まで外国人教師が不在であったが、明治三十九年から大正九年までは、ほぼ途切れることなく、外国人教師が在籍していたことがわかる。

なお、公文書『官吏進退・外国人雇使』⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾の調査から昭和六年発刊『福井県立福井中学校創立五十周年記念録』⁽⁶⁾「第六章舊職員表」中に

以下の誤植があることが判明したので付記しておく。

●『記念録』には、ハルカムの任期が「明治二十三年十二月」までと記されているが、実際は「明治二十三年三月」までであった。

●『記念録』には、ドンケル、キュルチスの国籍がアメリカ人であるが、実際はオランダ人であった。

ブラウネルは、福井県尋常中学校の三人目の外国人教師である。ブラウネルに先立ち、前任者二人について明らかにしたこと（を）を記し、当時の福井県尋常中学校の外国人教師の状況を知るための一助としたい。

(2) エン、ダブリュー、ハルカム（ホルカム）

図1に『明治二十一年官吏進退・外国人雇使』⁸に見いだすことのできたN・W・ハルカムの雇用関係文書を示す。翻刻は次の通り。

文部省往復□子総一二六〇號、

米國人 エン、ダブリュー、ハルカム

右之者福井縣尋常中學校英語及文學教師トシテ本年五月一日ヨリ來
廿二年三月三十一日マテ月給金百參拾圓ヲ以テ雇入度旨同縣ヨリ申
出自之不都合之處モ無之ニ付聽許可致ト存候此段請閣議候也

明治二十一年六月八日 文部大臣子爵森有禮

内閣總理大臣伯爵黒田清隆殿

『官吏進退』は、各省庁の官僚の任官、転任、退官等に関する公文書をまとめて綴った簿冊である。各年毎に綴られており、関係機

青木 福井のお雇い教師ブラウネルについて

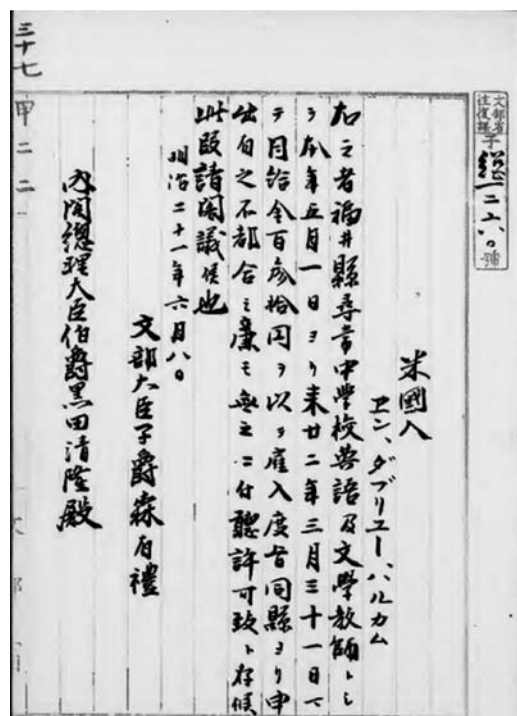


図1. ハルカムの雇入関係文書

関の別で、各年数十冊の簿冊となっている。この中で、外国人雇用に関する文書の簿冊が『官吏進退・外国人雇使』である。外国人の公機関への雇用に際し、各道府県知事の申請を受けて文部大臣が総理大臣に上申、閣議の開催・承認を願っている文書である。外国人教師の「国籍」、「氏名（カタカナ表記）」、「契約期間」「月給（金種別、金額）」、「勤務先」が記されている。当初、外国人教師の採用認可は閣議での承認が必要であり、その後、指令書が発令された。この制度は、外国人教師の採用増加に伴った事務処理簡素化のためか、明治二十三年四月から、報告事項に変わった。⁹

ハルカムは明治二十一年五月一日から勤務の契約で、月給は金百三十円であった。当初一年の契約であったが、契約を更新し明治

二十三年三月までの二年間勤務した。ハルカムは、福井県尋常中学校最初の外国人教師で、渡辺洪基が石黒知事に推薦し採用された。⁽²¹⁾

当時の『福井新聞』で筆者が確認することができたハルカム関係の記事を列記する。

①福井新聞 明治二十二年 十二月八日 日曜日

○ホルカム氏 当尋常中学校傭語学教師ホルカム氏は運動かたがた或人に誘はれ坂行きを為してその雁なり鳧(鴨)なりを獲る模様を
実見し実に面白し愉快なりいざその技倆を自心に試みるとそれぞれ
手続き以て坂杭を買ひ昨今は毎朝坂行きを為す由に聞き及べり

②福井新聞 明治二十三年 三月十六日 日曜日

○尋常中学校雇教師米国人ホルカム氏は今回期満て来る廿三四日頃当地出發本国へ帰らるる由なり聞く処によれば佐久間正氏の横浜行は右ホルカム氏を見送る為めの御用なりとの噂

○尋常中学校教員佐久間正氏は御用有之神奈川県横浜へ出張命ぜらる

③福井新聞 明治二十三年 三月十六日 火曜日

○勉勵の賞賜 当尋常中学校の雇教師として親切に書生を教授し薫陶の功動少からざりし米人エンタプリューハルカム氏もいよいよかねて記載のごとく解雇帰国の途に就く趣なるが教授囑托中勉勵につき金百五拾円を賜与さる

④福井新聞 明治二十三年 三月二十日 木曜日

○安立本県知事 には知事帰県及転邸の祝宴に中学校雇教師ホルカム氏の送別を兼ねて一昨十八日の晩元お舟町の自宅において本部

李家両書記官 西警部長 宮原収税長 久田中学校長 同校雇ホルカム氏 県庁各課長 警察本部各課長等を招き盛なる宴を開かれしと云

⑤福井新聞 明治二十三年 三月二十一日 金曜日

○ホルカム氏 は一昨日午後四時より安立本県知事 本部李家両書記官 加藤学務課長及同課員数名 尋常師範学校教員一同 久田中学校長及教員一同 河野福井病院院長等の諸氏を招ねき留別の宴を開かれしがいと盛なりしやに聞けり

⑥福井新聞 明治二十三年 三月二十三日 日曜日

○ホルカム氏 は一昨晩尋常中学校卒業生数名を五嶽楼に招き送別の宴を開けり 又た同氏は本日発途中学校職員生徒一同には市端赤坂まで見送るよし 前号の雑報に記載せしが矢張り其都合通り本日中腕車にて浅水、鯖江、武生等を経て陸路敦賀に出る由 同校の職員一同には武生或は敦賀町まで見送り教員及び生徒の有志数名には赤坂まで見送ると云ふ

以上のように、ハルカムは、『福井新聞』に関連記事が多く見られる点から地元の人々に広く親しまれたと推測できる。

○ホルカム氏 は一昨日下午四時より安立本縣知事本部李家兩書記官加藤學務課長及同課員數名尋常師範學校教員一同久田中學校校長及教員一同河野福井病院院長等の諸氏を招ねき留別の宴を開かれしがいと盛なりしやに聞けり

図2. ハルカムの送別会記事 (M 23.3.21)

①は、ハルカムが「坂鳥」に熱中したとの内容である。「坂鳥」は「坂鳥打」とも言われ、福井藩において藩士が行った鴨の伝統猟法で、江戸時代から昭和初期まで盛んに行われていた。冬季、現在の福井市門前町付近の水田に水を張り、大きな池（鴨溜、鴨泓（ふけ））とし、池に飛来した鴨が日没時に、山の斜面に沿って飛び上がるところを竿につけた網を投げ上げて捕獲する猟法で、現在の足羽山付近で行われていた。石川県加賀市片野鴨池で現在も行われている「坂網猟」と同様の猟法である。¹³後述するが、この「坂鳥」を、『日本の心』三十三章で、ブラウネルも行ったとの記述がある。「坂鳥」に熱中したとの記事からもハルカムが日本の文化を理解し同化しようとする積極的な姿勢が伺える。その他の記事②③⑥は、ハルカムの離任に際しての記事である。知事の自宅に招待されたり、勤務勉勵の結果、多額の賞与を賜っているとの記事から、ハルカムが、たいへん熱心に職務に励み他の教職員や生徒達、そして県知事からも大きな信頼を得ていたということがわかる。福井を出立する際的情景もたいへん心暖まる記事であり、多くの人と交わり、親交を深めた人間味に溢れる人物であったと見受けられる。

また、『福井縣立福井中学校創立五十周年記念録』⁶「舊先生回想談」に勝山千百里という旧教師がハルカムについて記した「外國人の聘用」という記事を見つけたことができた。左に示す。

「抑も學校に西洋人を聘用したのは藩の明新館であつた。さうして最初に來た者はルセイであつた。ルセイの居る間にグリフィスが來た（中略）其次に來た者はワイコフであつた其次はマゼットと言

ふ若輩であつた此事は今の中學校創立以前のことである、福井中學校の開校以後初めて聘用された外國人は、ミゾリー州の生れで、郷里はクレイカウンチーと聞いて居る。支那に十年斗りも宣教師をして居つた人で其名をエヌ、ダブリウ、ホルコンムと言つた。エヌとはニニアンでダブリューはウエンズエンと言ふ基督名である。世間ではハルカムで通つて居つた、余は彼と共に京都奈良伊賀伊勢志摩を旅行し東海丸に乗つて横濱に出て日光の小西旅館に滞在して居つた事もあり白山に登つたこともある。其彌次り方を記すと中々滑稽な面白き事もあつた。彼の白山に登つた時に彼は靴はきで大元氣であつた。已はロッキーマンに登つた事があるからそれから見ると白山は蟻であると大法螺を吹きながら白山の御前嶽の絶頂で朝の御來光を拝したまでは無事であつた。然し歸路彌陀ヶ原の室堂に這入つた時は疲れて寐て仕舞ひ如何に揺り起こしても一向起きないどうやらこうやら起したが病氣で歩かれぬと言ふ。仕方なしにやつとの事に人夫二人傭ふて代る代る背負うて山を降りることにした考へは悪くなかつたが彼は足が支へて困ると言ふ。横にして擔ひて呉れと言ふ。をし擔ひにすることは勿論出來ぬので無理やり横倒しにして擔ひ（中略）どうやらこうやら初夜の中に湯元に達したが醫者も藥もなく漸くにして夜は明けた。前日よりは少しく元氣ついたものの逆も歩かれぬので今一晚滞在することにした。（中略）漸く背る向きに負へと言ふことだと判決した。恰も六部が阿彌陀仏を負ふて歩くのと同様で旅館を出でて大杉峠の難所を越え漸く勝山の街に達し人力車を驅つて福井に戻つた此の事は懷舊談の一つなるかも知れぬ。」

ハルカムの本名がニニアン・ウエンズエン・ホルコンムでミズリー州クレイカウンチー生まれ、来日前、中国で十年以上宣教師をしていたことがわかる。グリフィスの白山登山は有名であるが、ハルカムもまた白山登山をしていたことも興味深い。この白山登山は明治二十一年夏に行われた。勝山氏はこの時のことを「白山紀行」として『福井新報』に寄稿しており、白山登山史の資料としても貴重と言える。¹⁴ 勝山氏と同伴で各地を旅したという記事からハルカムが同僚と良好な人間関係を築いていたことがわかる。また白山登山の記述から、ハルカムが長身であったこと、快活な人物であったこと、鷹揚で憎めない人柄であったことなどが窺える。

(3) ビー、ドンケル、キュルチス(キュルテアス)(ケルチス)

ハルカムの後任として、ビー、ドンケル、キュルチスの名前がある。『官吏進退』では、二通の関連文書が確認できた。¹⁰ 一通は、キュルテアスと表記されている。任期は前任者ハルカムの二年に比して四ヶ月と短い。当初は明治二十三年四月一日(明治二十四年三月までの任期で契約している。月給は百二十五円であった。

しかし、同年八月二十九日に「本人病氣ニテ辞職申出候ニ付本年八月十五日付限解僱候」との文書があり中途解雇となったことがわかる。当時の『福井新聞』にドンケル、キュルチスに関する記事は見つけられなかったが、「広告」の欄に「ドンケル、ケルチス」の名前を五件、見出すことができた、図3に示す。翻刻は次の通り。

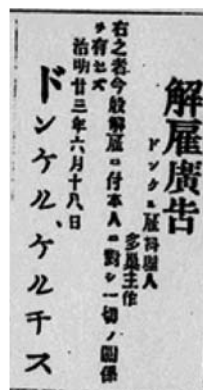


図3. ドンケルケルチス
料理人解雇広告
(M 23.6.18)

解雇広告 ドンケル料理人 多巢主作

右之者今般解雇ニ付本人二対シ一切ノ関係ヲ有セズ
治明廿三年六月十八日 ドンケル、ケルチス

内容は、ドンケル、キュルチスが、雇っていた料理人「多巢主作」を解雇したので、今後本人とは一切関係ないとの広告である。明治二十三年六月十八日の日付で、六月十九日(木)～六月二十二日(日)に同様の広告が四回掲載されている。広告の文調からすれば、解雇した料理人の金銭的な不正を危惧しての広告掲載と考えられる。ドンケル、キュルチスの神経質な人柄が垣間見える。明治十九年(二十四年)の全国の尋常中学校雇人外国人教師八十四人の内、オランダ人はドンケル、ケルチスただ一人である。中途解雇の理由は病氣とあるが、人間関係の構築が上手くいかず日本食や日本での生活になじめない心的疲労による離任の可能性も高いかと考える。

三 福井におけるブラウネルの足跡

(1) 公文書『官吏進退・外国人雇使』に見るブラウネル

図4に、筆者が確認したC・L・ブラウネルの福井県尋常中学校

雇用に関する公文書^{⑩⑪}を示す。①は雇入関係文書、②は解雇関係文書である。翻刻は、以下の通り。

①ブラウネル雇入関係文書

文部省往復撰虎四六四號

米國人 シー、エル、ブラウネル

右ハ本年九月一日ヨリ明治廿四年三月三十一日迄月俸金百貳拾五圓ヲ以テ福井縣尋常中學校英語及文學教師トシテ雇入候旨同縣知事ヨリ申出候ニ付此段及報告候也

明治廿三年九月十六日 文部大臣芳川顯正（文部大臣之印）

内閣總理大臣伯爵山縣有朋殿

十月七日 總理大臣、足免事

②ブラウネルの解雇関係文書

官甲六二〇號

福井縣尋常中學校雇教師 米國人シー、エル、ブラウネル

兵庫縣神戸商業學校雇教師 米國人ジョン、アレキサンダー、ブラウネル

右者本年三月三十一日雇満期ニ付解備

（中略）

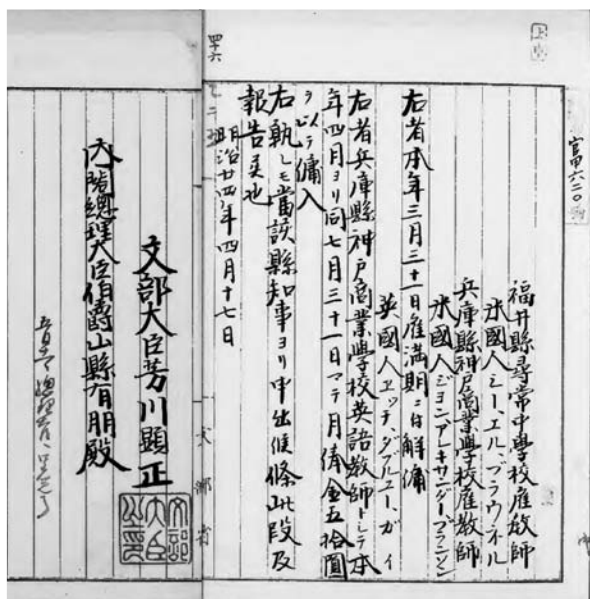
右孰レモ當該縣知事ヨリ申出候條此段及報告候也

明治廿四年四月十七日 文部大臣芳川顯正（文部大臣印）

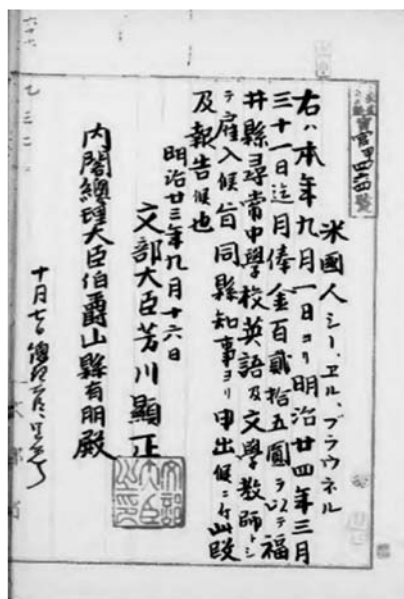
内閣總理大臣伯爵山縣有朋殿

五月十一日 總理大臣、足免事

青木 福井のお雇い教師ブラウネルについて



②解雇関係文書



①雇入関係文書

図4. ブラウネルの福井縣尋常中學校雇用関係文書

ブラウネルは、福井県尋常中学校と明治二十三年（一八八三）九月一日から明治二十四年三月三十一日までで契約した。担当教科は、英語と文学であった。月給は百二十五円。ブラウネルの前任校は、富山県尋常中学校で英語教師として明治二十一年十一月～二十三年三月三十一日までの勤務であった。月給は百円。富山県尋常中学校離任から福井県尋常中学校着任までの期間にブラウネルが、どこに居住していたかは不明であるが、東京の可能性が高い。

『日本の心』^②の記述を順に読み進めるとブラウネルは、明治十九年の来日後、明治二十一年十一月に富山県尋常中学校に着任するまでの間に福井での滞在経験があると考えられる。前任者ドンケル、キウルチスの急な退職で、県、中学校は、外国人英語教師不在の状況に困ったであろう。最初の福井滞在期に作られたコネクションがあったればこそ、後任者としてブラウネルに声がかかったのではないかと考えている。ちなみに月給は富山よりも二十五円増であった。

（2）『福井新聞』に見るブラウネル関連記事

ブラウネルの福井県尋常中学校勤務期間前後、明治二十三年九月～二十四年五月の『福井新聞』^⑬の記事を調べた結果、次の九件のブラウネル関連記事を見つけることができた。時系列に並べ、できごとについての考察を加えたい。

（A）ブラウネルの福井県尋常中学校赴任

① 福井新聞 明治二十三年 九月十二日 金曜日

◎ 中学校外国教師の雇入 舊東京府中学校の御雇教師ブラウネル氏は今度当中学校に雇入れたるに付き一昨夕敦賀より坂井港へ着同日当福井へ着したり 夫れに付き当中学校よりは齋藤教員坂井港迄出迎ひたり

冒頭の「舊東京府中学校の御雇教師ブラウネル氏」の記述に着目したい。この時点で「東京府中学校」とは東京府尋常中学校＝東京府立第一中学校である。先行研究では知られていなかったが、この記事からブラウネルが東京府中学校に勤務していた可能性が出てきた。勤務時期は、来日後から富山県尋常中学校に赴任するまでの期間か、富山県尋常中学校を離任から福井県尋常中学校赴任までの期間と考えられるが、前者の可能性が高い。根拠は、東京府中学校が、福井県尋常中学校の前任校ならば「前東京府中学校の御雇教師」とされるはずで、「舊」が冠せられた「舊東京府中学校の御雇教師」の表記は、東京府中学校が、前任校以前の勤務校を指すと考えるからだ。しかし、東京府中学校の旧職員録中にブラウネルの名前を見いだすことはできなかった。疑問が残る。

◎ 中学校外国教師の雇入 舊東京府中学校の御雇教師ブラウネル氏は今度当中学校に雇入れたるに付き一昨夕敦賀より坂井港へ着同日當福井へ着したり 夫れに付き當中学校よりは齋藤教員坂井港迄出迎ひたり

図5. ブラウネルの福井県尋常中学校赴任記事 (M 23.9.12)

「敦賀より坂井港へ着 同日当福井へ着したり」の記述から、敦賀から坂井港（三国）まで船で移動してきたことが分かる。東京からは、東海道線で米原を経由して敦賀に到着したと考えられる。

②福井新聞 明治二十三年 九月十三日 土曜日

◎雇教師の授業 前号に記し置きたる雇外国人教師米人ブラウネル氏は昨日より当中学校に出勤授業に 取掛かりたり

ブラウネルは、明治二十三年（一八九〇）九月十日に来福し、九月十二日（金）に福井県尋常中学校での授業を開始した。

（B）ブラウネルの新年会

③福井新聞 明治二十四年 一月二十四日 土曜日

◎新年宴会 今二十四日午後五時より本県尋常中学校雇米人ブラウネルが安立県知事を始め高等官近藤学務掛長 其他師範中学両校の教員諸氏三十余名を招請し、羽畔風月楼に於て新年宴会を開く由に聞けり

④福井新聞 明治二十四年 一月二十五日 日曜日

◎米人の新年宴会 昨日の紙上に本県尋常中学校雇米人ブルウネル氏が昨廿四日午後五時より羽畔風月楼に於て新年宴会を開く由掲載せしが招待する賓客の中に差支へあり延会なりしと云ふ
ブラウネルが新年会を主催し、知事を初め県内の高級官僚および中学校、師範学校の教員三十余名を招待したが事情により延期に

なったとの記事である。この頃の新聞記事として次のようなものがある。

a. 明治二十四年一月十七日「（前略）大雪（中略）福井市役所に於る積雪十七日午前十時五尺二寸六分（約一六〇センチ）」

b. 明治二十四年一月二十七日「（前略）予て不快引籠中の安立県知事は昨日より出勤したり」

c. 明治二十四年一月三十日「（前略）師範、中学、高等科福井小学の三校教員合併して昨廿九日羽涯月見亭に於て新年宴会を開きたり当日の来賓は本部書記官加藤津田両参事官学務掛長等なりと云ふ」（羽涯＝足羽山）

記事aからわかるようにこの冬の福井は豪雪であった。会の延期の原因は、bから推測すると主賓の安立知事が体調不調で欠席の旨を伝えてきたからであろう。延期された新年会が後日開かれたという記事はない。cの記事の宴会がそれか、もしくは知事は不在だが、同時期に別の主催者による同様の参加メンバーでの新年会が企画・開催されたため、ブラウネル主催の会は取りやめになったと考えられる。

（C）来福米人との懇親会

⑤福井新聞 明治二十四年 三月十日 火曜日

◎米人の投宿 北米合衆国人ベンゾービンレー氏は随行員日本人杉田長吉氏と共に当市橋南元石場縄屋へ投宿せしか同氏は学術研究を目的として全国を漫遊するよしにして目下猶滞在せり

◎又 同氏は一昨八日随行員と共に市中を散歩し午後一時より羽腰五嶽楼へ当中学校語学教師^(ママ)教米国人ブラウネル氏を招請して宴会をなし午後七時頃旅館繩屋へ帰宿せりと云ふ

⑥福井新聞 明治二十四年 三月十一日 水曜日

◎米人の出発 前号紙上に北米合衆国人ベンゾービンレー氏が橋南石場繩屋へ投宿したることを掲載せしが同氏は一昨九日坪田某の案内にて当市の重立ちたる起業家を巡回し午後五時頃旅館繩屋へ帰宿し同夜羽腰五嶽楼へ再び当中学校語学教師ブラウネル氏を招き送別の宴を開き昨朝大聖寺より金沢に向けて当地を出発せり

ベンゾービンレーなる米国人と二日連続で足羽山の五嶽楼で宴会をしたという記事である。おそらく二人は初対面だっただろうが、初日六時間も宴会をしたベンゾービンレーが翌日もブラウネルを招いているところを見ると、二人は意気投合したのであろう。この記事から、ブラウネルは快活で社交的な人物であったと推測できる。

(D)ブラウネルの送別会

⑦福井新聞 明治二十四年 三月三十一日 火曜日

◎ブラウネル氏の別宴 県尋師^(ママ)中学校語学雇教師米人ブラウネル氏は近々出発するにつき一昨二十九日羽涯月見亭に於て大久保師範学校長久田中学校長河野病院長等を招き留別の宴を開きたり

ブラウネルの送別会の記事である。前述のハルカムの送別会の記

事2(1)④⑤と比べると、小規模だった観がある。賓客に知事や県学務課長等県の行政関係者がいない。ブラウネルの任期が半年とハルカム氏に比べて短く、教職員、生徒、地元市民との交流がハルカム氏よりは浅かったことが理由であらう。あるいは、後に示すようにブラウネルの福井県尋常中学校の離職と離福の時期が一致していないことが原因かもしれない。

(E)ブラウネルの後任探し

⑧福井新聞 明治二十四年 四月一日 水曜日

◎久田校長の上京 久田中学校長は御用之れあり上京を命ぜらる或いは曰ふ語学教師米人ブラウネル氏の後任を雇入るる為なりと

ブラウネルの後任者雇用のために校長が東京へ交渉に行くという記事である。四月初旬の後任者探しは時期的に遅い気もする。結論からするとブラウネルの後任は外国人ではなく日本人であった。やや遅い時期の後任決定には、予算が関係していたのかもしれない。この時期の教師の給料、予算関係の『福井新聞』の記事を数例紹介する。

a. 明治二十四年二月二十一日「江州彦根なる県立彦根尋常^(ママ)小学校にては昨年三月一日より百四十円の月俸を以て米国ハアルウイ、クーランド氏を雇聘したる処 昨年十一月県会にて大いに氏の俸給を減じて一ヶ月五十円と定めたるよし(後略)」

b. 明治二十四年四月五日「◎叙任及辞令(中略)○任福井県小

学訓導足羽郡東郷小学校在勤を命ず（自今月俸金八円支給） 土屋じゅん（後略）」

c. 明治二十三年十一月十五日「○通常福井県会 昨十四日の模様は左の如し（中略）尋常師範学校費の第二次会をその細件につきて審議に附す（中略）総金額一万五千三十三円八十銭九厘 内訳職員給五千四百六十円は女子部を廃したるにつき教員一名を減ずる見込みを以て四千八百七十円と修正す（中略）教諭兼教頭の俸給を（中略）本年は五百円で忍んで貰ひ 幹事も四十円の月俸を給せずとも二十円で立派な人物を得らるると云ふにありし（後略）」

d. 明治二十四年三月十二日「（前略）私立正則英学校は組織略完備して近日開校する由にて米人フルトン氏は同行の聘に応じて来福する趣なり」

前述の通り、ブラウネルの福井県尋常中学校での月給は百二十五円であった。前々任者のハルカムは百三十円であった。筆者の調査では、明治十九年～二十四年までに雇用された全国の尋常中学校外国人教師の月給の平均は九十三円で、概ね百円が相場だった⁽¹⁾。福井県尋常中学校の給料は、他県よりも高かったといえる。また、外国人教師の給料は、記事b、cの内容から考えても日本人学校関係者の給料と比べて破格の高給だったといえる。県の教育予算全体からみても高額の出費だったはずで、隣県滋賀県の記事aのような経費削減処置は全国的に検討されていたと考えられる。福井県でも当時、教育予算の見直し削減が検討されていたことは記事cからも明らか

で、師範学校でこのように予算削減されたように、中学校予算も、高額な外国人教師の給料の見直しが検討されていた⁽²⁾。明治十九年「中学校ノ学科及び其程度」で導入された必修科目「英会話」に伴い全国各中学校で実施された外国人英語教師採用は、この時期、転換期を迎えていたようである。記事dのように私立の英語学校等の外国人教師の存在も影響していたのかもしれない。このような事情からか、福井県尋常中学校（福井中学校）では、ブラウネルの後十五年間外国人教師を採用していない。ブラウネルの後任は、東京出身の日本人内田巽という人物で、任期は明治二十四年九月～三十年三月の長期であった。

(E) ブラウネルは明治二十四年四月末に福井にいた

⑨ 福井新聞 明治二十四年 四月二十四日 金曜日

◎ 耶蘇の結婚式 福井地方裁判所書記 大藤清蔵氏の長女何子（十九）は今回西京の同志社を卒業して帰省せしが愛媛県伊予国松山の産にて同地師範学校の卒業生某（廿六）と結婚したるよしにして去る二十日自宅に於て結婚式を挙げたるが最初に伝導師宣誓書を朗読し終るや賀殿と嫁御が出て来り互いに座につくや又伝導師出で来り宣誓書を兩人に読み聞かせ次に両親出でて宣誓書を読み聞かせ之れにて式を終わり祝宴を開きたり 当日は尋常中学校語学教師ブラウネル氏、水野書記等の臨席あり 水野氏は狂言を舞ひたりと

福井市内で、同志社出身の日本人キリスト教徒の結婚式があり、ブラウネルが出席したとの記事である。意外なことは、この時期にブラウネルがまだ福井に滞在していたという事実である。前掲の記事⑦（二十三年三月三十一日）に「近々出立するにつき」とあるのに、なぜ、四月二十二日になっても福井にいたのであろうか。あるいは、いったん東京へ行った後に結婚式のために再度福井を訪れたのだろうか。さらに疑問となるのは、この新聞記事に「尋常中学校語学教師ブラウネル氏」とある点である。ブラウネルの雇用契約は三月三十一日で切れているのに、四月二十二日の段階で肩書きが「尋常中学校語学教師」となっているのはなぜか。すでに離任しているのならば「前尋常中学校語学教師」とあるべきだが。もしかすると、この時期、ブラウネルはまだ福井県尋常中学校で英語を教えていたのではないかと考え、調べた結果『福井県議会議史第一巻』²¹から、ブラウネルが明治二十四年五月十一日まで福井県尋常中学校に勤務していたことがわかった。前述の後任内田夔の着任が二十四年九月であることが理由と考えられる。なお、ブラウネルの福井出立の日時を示す新聞記事等は、見つけることができていない。

（3）『日本の心』の記述中に見る福井のブラウネル

ブラウネルの著書『The Heart of Japan』は、日露戦争で欧米人に関心の高まった日本の文化・風俗の紹介書として、ブラウネル自身の日本での体験や見聞がユーモアを交えて生き生きとした筆致で記されている。現代の私達にとっては、既に失われた明治中期

の日本の社会や文化を知る上で興味深い内容となっている。『The Heart of Japan』は、高成玲子氏によって翻訳が試みられたが、氏の逝去に伴い、その志を継いだ「富山八雲会」の手によって平成二十五年に『日本の心』²²として出版された。

『日本の心』中の記述は、一部フィクションを含んでいると考えられるが、ブラウネルの人柄や性格を知るための好材料である。また、ブラウネルの日本国内での動向を知る上での大きな手がかりを含んでいる。『日本の心』の記述に従ってブラウネルの足跡を辿ると、明治二十年八月～二十一年十一月の期間に、ブラウネルが、東京↓福井↓富山の順に移動していると推測できる。つまり、明治二十三年九月の福井県尋常中学校赴任は、ブラウネルにとって、少なくとも二度目の福井訪問であったと考えられる。

『日本の心』は、三十七章から成るが、この中にブラウネルの福井での体験を記した箇所が何ヶ所が見られる。明らかに舞台が福井とわかるのは、第一章「太郎兵衛とお祈りポンプ」、第二章「おとよさん」第三十三章「日本のスポーツマン」である。

第一章の「お祈りポンプ」は、当時の福井の養蚕業についての記述もあるが、現在のところ舞台となった場所を特定できていない。

第三十三章「日本のスポーツマン」は、ブラウネルが「黒伯爵」と呼ばれる人物と東京で乗馬や鴨猟などで交流する様子が描かれている。（本名が記されていないこの「黒伯爵」は、伯爵烏丸光亨と考えられる。）ブラウネルは、この「黒伯爵」の叔父が住む福井へ珍しい鴨猟をするためにやってくる。これが、先述の福井の伝統鴨猟「坂

鳥」で、ブラウネルが福井の足羽山付近で「坂鳥」を体験する記述が詳細に描かれおり当時の坂鳥猟の実態を知る上で興味深い。この「坂鳥」については、以前、別稿に記したので、ここでは省略する。そして、ブラウネルの福井に関する記述で最も興味深いのが、第二章「おとよさん」である。この「おとよさん」とはほぼ同様の内容が、ブラウネルの第一作『Tales from Tokio』に於「OKUSAMA」というタイトルで第一章に記されており、ブラウネルにとって印象深いでき事であったようだ。以下にこの第二章についての考察を記す。

◎『日本の心』第二章の舞台と登場人物の同定

『日本の心』第二章「おとよさん」には、ブラウネルが越前の本保にある「辰巳」という所を訪れた時に知り合った「おとよさん」という女性について記されている。本文を一部引用する。

「次郎兵衛は、辰巳屋敷の友人達の所へ連れて行ってくれた。面白く古めかしいところだったが（中略）辰巳で私たちは、日本の家庭を親しく見る機会を得て、人々の生活の鼓動が聞こえるほどまで近づいた。主人の彦三郎は家に居ないことが多かったので、大して会うこともなかったが、彼の父と母とはよく知り合うようになった。それに子どもたち、お人形のような妻、最後になったが一番大切な人、以前妻だった優しい女性と知り合った。この女性の名前がおとよだ。（中略）辰巳の主人はこの近辺一帯の大地主で、人々が住み着くようになって以来の「本保」、すなわち北へ伸びている村と、丹生郡の境界にまで続いている碁盤のような美田の所有者で、それ

は越前でも最も豊かな郡として知られている地域だった。（後略）」

内容の概略は、日本人の知人と訪れた「辰巳」で大歓迎を受けたブラウネル一行が、数日滞在して辰巳の人々と懇意になる。辰巳は、大地主・大金持ちであり家人は豊かな暮らしをしている。当主の「彦三郎」は、家に居ないことが多いが、道楽者で、家に居るときは芸者衆を呼んで大騒ぎをしている。彦三郎の妻で一男一女の母であるおとよさんは、健気に夫に尽くすが、放蕩者の彦三郎は、ある日、十四、五歳くらいの芸者を屋敷に連れてきて同居するようになる。そしておとよさんは離縁されて辰巳を去る。それ以来、一歩も屋敷に足を踏み入れないおとよさんであったが、関西方面へ行く途中に辰巳に立ち寄り、屋敷の塀の外で自分の子供達との面会を待っている時の様子をブラウネルは、同情的な心情で記している。

このように、舞台が越前の本保と明記されていることから、「辰巳」の場所と作中人物「彦三郎」を同定することを試みた。

（A）本保陣屋について

まず、『日本の心』第二章「おとよさん」の舞台である「本保」は、現在の福井県越前市本保町、数年前までの武生市本保町（昭和二十五年以前は丹生郡吉野村本保、明治二十二年以前は丹生郡本保村）として間違いない。現在、田園地帯の一集落に過ぎない本保であるが、藩政時代は幕府の直轄地（天領）で、幕末には越前国内の天領約六万石を支配した本保陣屋の所在地として、村といっても小城下町の観があった。この本保陣屋の代官は飛騨郡代と兼務で、普

段は飛騨高山にいて、年に一度、秋の収穫期にのみ本保へ出向いてくるのが慣例であった。通常の業務は幕府から出向いた手付手代と呼ばれる約八人の旗本が執り行っていた。本保陣屋に勤める武士階級はこの手付手代のみだったとのことで、地元の農民（地元の地主層）が手付手代の差配によって、陣屋の諸役に携わっていたようである。例えば陣屋の雑務的御用を一手に引き受ける仕事に携わる農民を「割元」といい、江戸送金・廻米から、支配下村々への回章差立てまでを職掌としていた。その他に、管内から集まってきた大庄屋ならびに庄屋などが宿泊した「郷宿」というものを営んだ家もあった。郷宿とは、単なる宿舎ではなくて、これらの人たちの倶楽部とでもいった性格をもっていたと考えられている。手付手代の下僚として、書役などに出仕した人々および雑役夫などの、いわゆる小者までを入れると、日々、陣屋に出入りした人々は相当な数にのぼり、本保陣屋界隈はそれらの人々の生活の場として商家なども軒を連ね賑わっていたらしい。明治に入って陣屋は廃されたが、その名残は続いていたと考えられる。（明治二年版籍奉還後、旧天領は本保県と称す。明治四年十一月本保県廃止）¹⁶

（B）「辰巳」と「彦三郎」の同定

本保の概要を知る資料として『吉野村史』¹⁶がある。これによって、幕末・明治初期の本保の様子をかなり詳しく知ることができる。

「辰巳」とは何かと言えば、それは本保に居住する大地主の家であることは、『日本の心』の本文で明らかである。『吉野村史』で幕末

から明治の本保の大地主の記述を探した結果、河野次郎右衛門とその一族の存在が明らかになった。即ち、元寇の武人として知られる河野通有の後裔が、元亀・天正の頃（戦国時代末）越前国丹生郡本保に土着し、郷士として勢力を広げた。以後、幕末・明治に至るまで、その一族の数家が本保一帯の大地主であった。「河野次郎右衛門」家が本家である。『吉野村史』には、安政七年（一八六〇年）の宗門人別帳をもとに、本保の河野一族所有の土地の石高について次のように記されている。この中に「辰巳」の記述を見つけた。左に記す。

「（前略）河野家は（中略）この次郎右衛門（荏州先生）をはじめ、良輔（三百拾六石八斗一升九合・本保村ほか二か村・俗称辰巳さん）（中略）など、いわゆる先生の村親類六七軒で、千二百石にもなんなんとする田畑宅地を所有する豪勢さ、この一族が、いかに裕福な一族であったかを知ることができる。」

この記述から、安永七年において本保の河野一族の数家が大地主であり、裕福であったことがわかった。そして記述から「辰巳」は本保の郷士河野一族の「河野良輔」家の屋号であることが明白となった。『日本の心』第二章「おとよさん」でブラウネルが記している「辰巳」は、この「河野良輔」の屋敷と断定してよいであろう。筆者は、『本保村田疇全図（弘化三年（明治四年））』に河野良輔の屋敷を見いだし実際にその屋敷跡を確認することができた。河野良輔の屋敷跡は、本保陣屋跡のほぼ南東（辰巳Ⅱ巽）の方角にあり、これが屋号「辰巳」の由来と考えられる。「辰巳」の屋敷は六百坪以上の土地に七つか八つかの土蔵と住宅が屋根の棟を並べていたと言われている

が、「辰巳」の人々は、明治三十五年に東京へ転居してしまったので、現在、当時の建物や庭は残っていない。五箇用水沿いの石垣にわずかにその名残を見るだけである。

ブラウネルが「辰巳」を訪れたのは明治二十年代初期で、安永七年から約三十年後であるから安永七年当時の土地所有者達は、ブラウネルの「辰巳」訪問時の一世代前と考えられる。このことから、「日本の心」第二章に記される「彼の父」が「河野良輔」であると同意できる。そして、記述中の当主「彦三郎」の氏名は「河野彦三郎」と推測できたので、各資料を調べたところ、『福井県議会史議員名鑑』¹⁸に県会議委員河野彦三郎の名を見つけることができた。「議員名鑑」の河野彦三郎の欄には、彼が本保に居住していたこと、彼の屋敷が「辰巳」とよばれていたが明記されており、『日本の心』第二章に登場する「彦三郎」は、福井県会議員河野彦三郎であることが明らかにになった。『日本の心』の文章中の人物を実際の人物に同意できたことで、『日本の心』中の記述の信憑性が高まったと考えている。

〔C〕「おとよさんの元夫」河野彦三郎の生涯

『福井県議会史 議員名鑑』¹⁸における河野彦三郎の記述を要約して記す。

「河野彦三郎（一八六二—？）文久2年（一八六二）、丹生郡本保村河野良輔の子として生まれる。明治二年六月、版籍奉還による本保陣屋の廃止、本保県庁の設置に伴い、陣屋に本保県庁がおかれる。

彦三郎は給仕として本保県庁へ出仕。月給一兩二分。一日おきの出勤であった。明治二十年頃、本保の消防組の組織に尽力。消防組の一カ年の経費を自己負担したり、消防組初集金費などを区民の先頭になって寄付をする。明治二十二―二十三年、本保の区長として区のとりにとめにくす。西田中警察署の新築に区民有志を誘って経費を寄付し、安立福井県知事から感謝状を授与される。明治二十三年、三月、福井県議会議員に初当選。翌二十四年八月、制度改革によって退職。初期における県会の運営と県政の発展に尽力。政治面のリーダーであった反面、祭礼などの伝統的なものを大切にし、毎年八月十五日の地元の祭り（大井祭）には、金銭の外、米、油、野菜、酒などを寄進し、感謝の念を表す。明治三十四年、六月二十五日、東京の浅草へ一家で転居。その後、本郷駒込へ転居。以後の消息不明、没年不明。現在、屋敷跡は、土台の石垣だけが残っている。また、彦三郎の父、良輔の墓が郷里幸善院境内にあるが、香華を手向ける縁者も絶えている。（昭和五十七年現在）」

河野彦三郎は、明治二十三年に県議会議員に当選しているが、その前後には、福井県の自由民権運動家、杉田定一（政治結社「南越倶楽部」の主要メンバーとして活躍している。明治二十二年八月の南越倶楽部臨時大会で「長野で開かれる東北十五州会へ黒田道珍、河野彦三郎を派遣すること」、「帰福後、黒田、河野を各郡への演説者として派遣すること」が決定されている。¹⁹）また、明治二十三年九月十三日の『福井新聞』に次のような記事が載っている。

「◎河野彦三郎氏 丹生郡の同氏は来十五日執行の立憲自由党結

党に臨む為め近日上京すべしと云ふ」

板垣退助が新たに結党した「立憲自由党」の結党大会に臨むため河野彦三郎が上京するという記事である。この記事は、奇しくも前掲(2)(A)②の「ブラウネルの授業開始を伝える記事」と同日の記事で、同じ段に掲載されている。

河野彦三郎は、一八六四年生のブラウネルと同世代で、二歳年長であった。そして、ブラウネルが日本に滞在していた明治十九年(二十四年頃が、彦三郎の人生、社会的地位の絶頂期であったことがわかる。ときに彦三郎二十四(二十九歳、ブラウネル二十二(二十七歳である。『議員名鑑』の記述による河野彦三郎は、県政や地元に貢献した篤志家であるが、『日本の心』に記される彦三郎は、家庭を顧みず財産を散財するどうしようもない浪費家、道楽者である。ブラウネルのこのような人物評価は、明治中期の日本とアメリカの社会・文化の違いによるものかもしれないが、歴史上の人物評価の難しさを感じる。

(4) ラフカディオ・ハーンとブラウネル

明治期、島根県尋常中学校に勤務した小泉八雲ラフカディオ・ハーンは有名であるが、ブラウネルが福井県尋常中学校に勤務した時期は、ハーンが島根県尋常中学校に勤務した時期と重なっている。図6に筆者が見いだしたラフカディオ・ハーンの島根県尋常中学校雇入に関する公文書^⑩を示す。翻刻は次の通り。

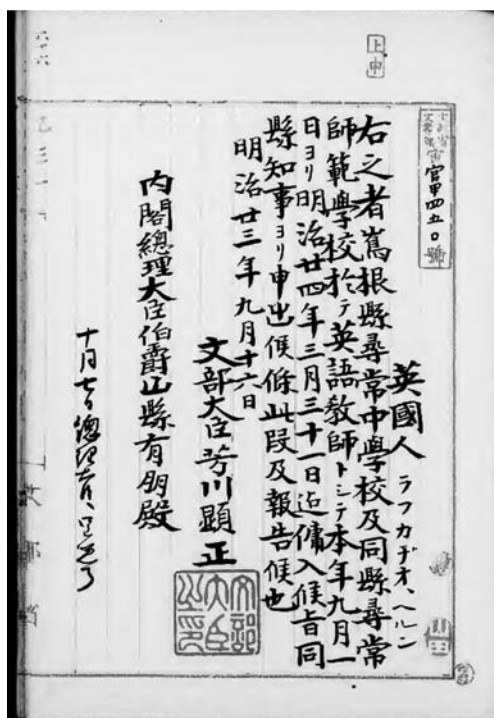


図6. ハーンの雇入関係文書

文部省往復録寅甲四五〇號
英國人 ラフカディオ・ハーン

右之者島根縣尋常中學校及同県尋常師範學校於テ英語教師トシテ本年九月一日ヨリ明治二十四年三月三十一日迄傭入候旨同縣知事ヨリ申出候條此段及報告候也

明治廿三年九月十六日 文部大臣芳川顯正(文部大臣之印)

内閣總理大臣伯爵山縣有朋殿

十月七日 總理大臣、足免事

この文書と前掲二(1)①図1のブラウネル雇入関係文書を見比べてみて、両者の雇入期間、文部大臣の上申日付、総理大臣の決裁日付

のいずれもが同一であることに気づいた。両者の比較を表1に示す。

つまり、「ハーン」の島根県尋常中学校雇入」と「ブラウネルの福井県尋常中学校雇入」の文部大臣から総理大臣への上申文書は、共に明治二十三年の九月十六日に発せられ、十月七日という同一の日に総理大臣決裁が下りていたことが明らかになった。また、二人の雇用期間も共に明治二十三年九月一日から明治二十四年三月三十一日となっており全く同じである。文書番号を確認すると、ハーンの文書は「文部省往復輯寅 官甲四五〇号」、ブラウネルのは「文部省往復輯寅 官甲四六四号」で、とても近い番号である。両文書は

『官吏進退・外国人雇使』の同じ冊子に綴られており、ハーンの文書が六一六頁、ブラウネルの文書が六一七頁となっていることを見出した。最初に述べた日露戦争中の全米公共図書館の日本関係書籍の人気図書第一位の『神國日本』の著者ハーンと、第二位の『日本の心』の著者ブラウネルが、十四年も前に、日本の公文書冊子の

表1 ハーンとブラウネルの雇入公文書の比較

雇入教師名	ラフカディオ・ヘルン	シー、エル、ブラウネル
雇入学校	高松縣尋常中学校及同縣尋常師範学校	福井県尋常中学校
雇入期間	明治23年9月1日 ヨリ明治24年3月31日	明治23年9月1日 ヨリ明治24年3月31日
報告者	文部大臣 芳川顕正	文部大臣 芳川顕正
報告日付	明治23年9月16日	明治23年9月16日
決裁者	内閣総理大臣 山縣有朋	内閣総理大臣 山縣有朋
決裁日付	明治23年10月7日	明治23年10月7日
文書番号	文部省往復輯寅 官甲450号	文部省往復輯寅 官甲464号
収録簿冊	明治廿三年 官吏進退・外国人雇使十九	明治廿三年 官吏進退・外国人雇使十九
ページ	616頁	617頁

同じ簿冊の前後するページに名を連ねているという事実是不思議な発見であった。なお、九月十六日付けで文部大臣から総理大臣への雇入上申が行われた外国人教師は三名だけで、ハーンとブラウネル以外の一名は、有名な医学者ベルツで雇入先は医科大学であった。タイミング的に、もしかするとハーンが福井県尋常中学校へ、ブラウネルが島根県尋常中学校へ赴任した可能性もあったかもしれないと考えると面白い。

ハーンは、明治二十三年（一八九〇）四月四日に初めて来日、横浜に到着した。八月下旬に東京を出発し三十日に赴任地松江着、九月二日に中学校に初出勤している。一方、ブラウネルは、明治二十三年三月末に富山県尋常中学校を退任後九月に福井県尋常中学校に赴任するまでの消息は不明であるが、東京に居住していた可能性が高い。赴任地福井着は九月十日である。とすれば、明治二十三年四月～八月末に、ハーンとブラウネルが横浜と東京という同じ首都圏に滞在していたことになり、国内に外国人が少なかった当時、状況証拠としては、二人が出会っていた可能性もゼロではないかも知れない。『日本のこころ』第四章「お風呂」の中でブラウネルは、友人ガードナーの言葉に託して「日本について書いた人の中で、これまで所、誰より共感を示しているラフカディオ・ハーンでさえ、風呂にはほとんど注意を払っていません。」と記している。ハーンよりも四年先立つて来日したブラウネルの、自らの日本通としての矜持を示す記述のようにも思える。何となく以前にハーンと面識があったような書きぶりとも考えるのは穿った見方に過ぎるだろうか。

おわりに

今回、筆者が近年確認することができたC・L・ブラウネルの福井県関係資料をまとめて紹介した。同時代資料からブラウネルが福井県尋常中学校に勤務していたことを確実に証明できたと考えている。また、ブラウネルの前任者達についても記し、福井県尋常中学校における外国人教師の実態や雇用状況等についてもわずかながら明らかにできた。しかしながら、今回示した公文書や新聞記事等の多くは客観的事項を記すのみで、ブラウネルの業績や人間像を知るための具体的エピソードに欠けている。筆者は、これを補うものとしてブラウネルの著書『日本の心』が使えないかと考えている。この観点から、『日本の心』の作中人物を实在人物に同定できたことは、『日本の心』の記述の信憑性を高める上で有意義であったと考えている。

本文中に記した通り、ブラウネルは、離日後、ジャパン・ソサイアティの例会で本願寺に関する発表をしている。また大谷探検隊出発の記事も書いている。このようにブラウネルが本願寺と深く関わるようになったきっかけが、真宗王国と呼ばれる福井、富山での生活であったことは想像に難くない。本願寺派教団幹部とのコネクションが福井、富山で生まれていた可能性が高いのではなからうか。今後できれば、ブラウネルと明治期の浄土真宗本願寺派との関係について、福井を中心に調べてみたいと考えている。

ラファディオ・ハーンが来日し、ブラウネルが福井県尋常中学校に赴任した明治二十三年（一八九〇）は、前年の憲法発布を経て国

会が開設された年である。江戸時代から続く社会形態と、その後の大正・昭和へと続く社会形態との境目と言える一大画期であった。そして、その転換期の日本での体験をもとにハーンは『神國日本』を、ブラウネルは『日本の心』を著した。既に欧米型近代社会の弊害を周知している彼らには、時代の転換期の日本で、今まさに失われようとしているものの価値がよく見えていたのかもしれない。

註

- (1) 塩崎智「日露戦争中、米国で読まれた『日本』」（『敬愛大学国際研究』第十四号、二〇〇四年）
- (2) C・L・ブラウネル・高成玲子原訳・富山八雲会編『日本の心』（桂書房、二〇一三年）
- (3) 高瀬重雄「お雇い教師ブラウネルについて」（『富山史壇』六十七号、越中史壇会、一九七七年）
- (4) 高成玲子「富山のお雇い外国人教師（その1）」（『英学史研究』二十七号、日本英学史学会、一九九四年）
- (5) 高成玲子「富山のお雇い外国人教師（その2）」（『英学史研究』二十八号、日本英学史学会、一九九五年）
- (6) 『創立五十周年記念録』（福井県立福井中学校、一九三二年）
- (7) 青木孝文「明治「中学校令」下におけるお雇い外国人教師の雇用状況について」（『東日本英学史研究』二十一号、東日本英学史学会、二〇二二年）
- (8) 『明治二十一年官吏進退二十九・外国人雇使』（内閣、一八八八年）
- (9) 『明治二十二年官吏進退二十七・外国人雇使』（内閣、一八八九年）

青木 福井のお雇い教師ブラウネルについて

- (10) 『明治二十三年官吏進退十九・外國人雇使』(内閣、一八九〇年)
- (11) 『明治二十四年官吏進退二十一・外國人雇使』(内閣、一八九一年)
- (12) 『福井新聞マイクロフィルム明治二十―二十四年』(福井県立図書館蔵)
- (13) 青木孝文「福井のブラウネルについて―鴨の「坂鳥打」狐を中心に―」(『へるん倶楽部』第十号、富山八雲会、二〇一二年)
- (14) 『福井新報、明治二十一年八月六―九、十一、十四、十五、十七、十八日』(福井県立図書館・文書館蔵)
- (15) 『東京府立第一中學校創立五十年史』(東京府立第一中學校、一九二九年)
- (16) 斎藤楓堂『吉野村史』(武生市吉野小學校教育振興会・同窓会、一九六二年)
- (17) 「本保村田疇全図」(『福井県史資料編十六上絵画・地図二十七』(福井県、一九九〇年)
- (18) 『福井県議会史 議員名鑑』(福井県議会、一九八二年)
- (19) 『福井県史 通史編5近現代一』(福井県、一九九四年)
- (20) 青木孝文「ハーンとブラウネルの接点」(『へるん倶楽部』第十七号、富山八雲会、二〇一九年)
- (21) 『福井県議会史第一巻』(福井県議会史編纂委員会、一九七二)



『The Heart of Japan』の挿入写真(1903 ロンドン版)

前列左から2人目がブラウネル

(国際日本文化研究センターデータベースより)